



舊清紀

乙

32
2

15
32
2止



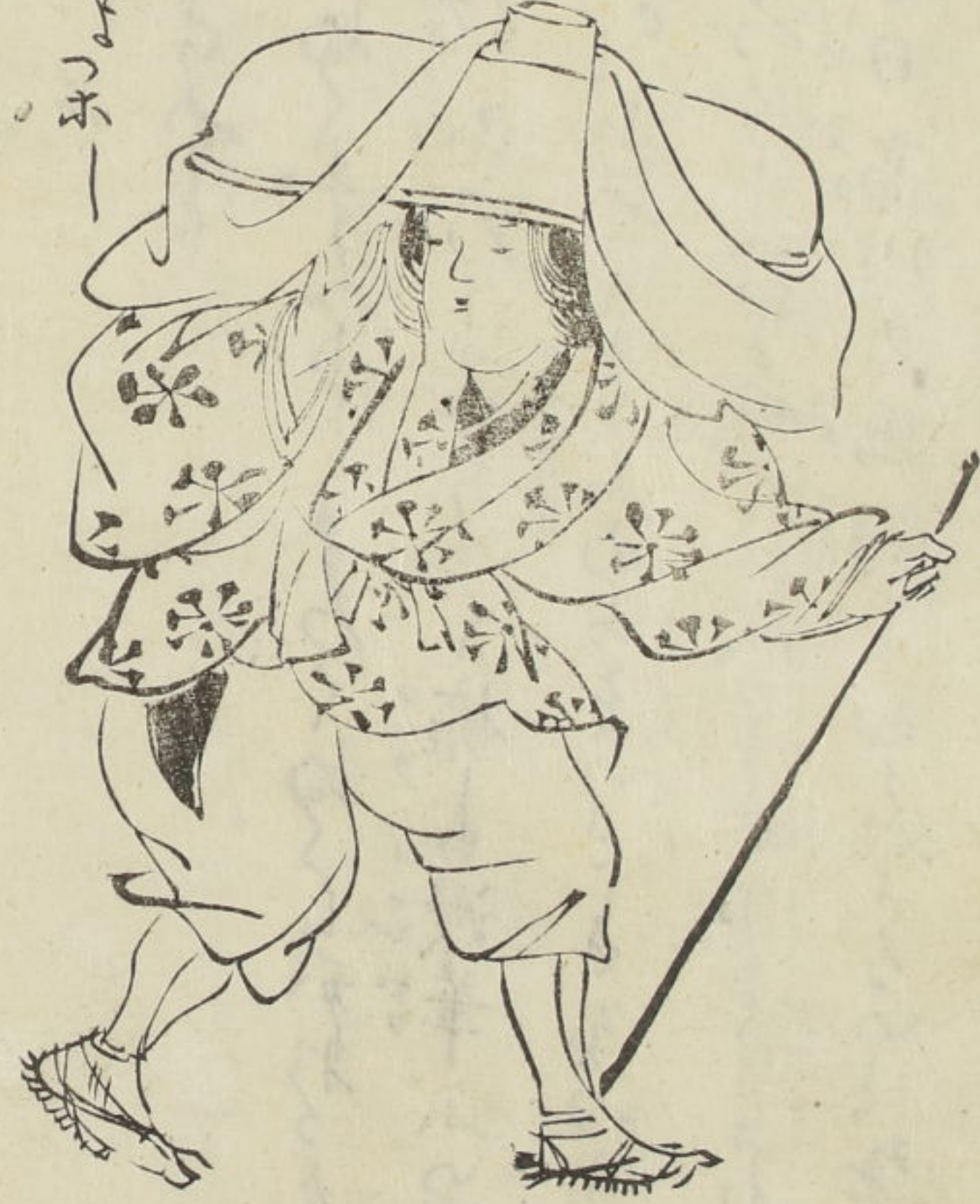
神とありと紀の一書ハ投其杖是謂岐神此云布那とありしと黄
泉の條一書ハ投其杖曰自此以還雷不敢來是謂岐神此本
名号未名戸之祖神鳥とありこの御名乃未名戸クナドなりしと
無来と止名をへる意なり戸ハ門カドなりしとがら標ヘタなり衝ツキと
らば道と標とたてて限セと示ししと人ヒ意と御名とを教あり
るはあとの意とるべしとハ登利ト為ハせしりめと神の
づらとせしとせしりめとをがらとるべしと
標とたつとるべしとハとるといふと式ハ開遣唐船
居祭社住吉と開船居時モとありしと船居とハ湊と船とと
置處をいふ歌イ居雲居イとありしと古書ハ鳥居と
りしと伊勢西宮儀式張イセふりしとハ御門十一間

按内記ハ江蘇
次新神事記ハ
三の鳥居よりハ
第一の鳥居より第三
二の鳥居よりハ
すく鳥居と俗稱
古記ハ第三の御門と
ハカ
社ハ代官ハ御屋
ハ伊勢白の基
伊勢舟の二神
貞觀九年ハ宮
宣下しハ宣下
風の宮よりハ正應六
年宮より宣下
兼吉の宮よりハ
神初ハハハハ

中カガ下カ於フ普御門三間於不普御門八間とありこの於
不普御門とありしと鳥居ありしと後のものれしと
西宮按内記とありしと三鳥居からハ俗稱なり古記ハ荒垣の
御門ハ板垣乃御門とありしと社とをいふと
ハ屋代ヤシロと上古ハ神の鎮座とありしとハ土を高くし
木と植ウとありしと乃鳥居とありしと端出之繩と
くつ森モリのけらとありしと宮ハ
より宮柱太敷立而齋奉ヤシロハ社ヤシロハハカハ
とありしと御門イカドありしと上右のすく鳥居とありしと
ありしと神のありしと何くのありしと杜トの字を

日高川繪卷寫

人乃あ世いん
くはし
さやが
か
か
か



きうまはく
かぬもの
か
か
か
か



日高川

紀キふり駿スシ別アサ浅間アサ木コ華ハナ開サク耶ヤ姫ヒメとト富フ士ジもモねネれレ伊イ勢セ朝アサ明ミ
 郡コホリ布フ自ジ神シノ社カミ櫻サクラ神カミ社カミ相アイ並ニ甲カ斐ヒ国クニ金カネ櫻サクラ神カミ社カミ此コノ神カミとトうウル
 又マタさサくクハハ開サク耶ヤ乃ノ轉テンるル或オハハ咲サキ簇ムラのノ心ココロのノ約ツクくクれレり
 せセいイつツつツのノ心ココロをヲ略リョクすス浅間アサのノ心ココロをヲ略リョクすス
 あアさサくクのノ心ココロをヲ略リョクすスのノ心ココロをヲ略リョクすス通カヨ音フユエをヲ櫻サクラのノ轉テンと
 さサくクあアさサくク大オホ宮ミヤ甲カ斐ヒのノ吉ヨシ田タもモ浅間アサ大オホ神カミとトはハ富フ士ジの
 神カミハハ木キ華ハナ開サク耶ヤ姫ヒメ命ノミ火ヒ出デのノ義ヨシ火ヒ出デ見ミ余ノミあアとト開サク
 耶ヤ姫ヒメ命ノミあアとトいイふフ御ミ名ナあアとトいイふフ火ヒ出デ見ミ余ノミあアとト開サク
 富フ士ジのノ神カミハハ女メ体タイあアとトいイふフ開サク耶ヤ姫ヒメ命ノミ
 竹タケ取トリ物モノ語コトあアとトいイふフ姫ヒメ命ノミあアとトいイふフ天アメふフかカつツの
 開サク耶ヤ姫ヒメ命ノミあアとトいイふフ天アメふフかカつツの

知チとト士シハハ通ツ音フユエあアとトいイふフ萬マン葉エフ集シフ乃ノこコのノ例レイねネら
 ぬヌ此コノ富フ知チるル神シノ社カミとト富フ知チふフれレるル草サウ書ショよヨうウつツいイひヒもモ
 ちチのノ草サウ書ショとト士シふフつツいイひヒもモあアとトいイふフいイひヒもモあアとトいイふフ
 このノ條ジョウもモよヨのノ心ココロをヲ略リョクすスのノ心ココロをヲ略リョクすスあアとトいイふフかカのノ心ココロをヲ略リョクすス
 人ヒトのノ心ココロをヲ略リョクすスのノ心ココロをヲ略リョクすスあアとトいイふフいイひヒもモあアとトいイふフ
 草サウ書ショよヨうウつツいイひヒもモあアとトいイふフいイひヒもモあアとトいイふフ
 おオふフれレん

旧蹟紀聞下終



52
21

